

方面にまで立込む考もなく漫然筆を運んでこゝに至つたが、今にして思ふと初めから節目を分けて幾分組織的に記述した方がよかつたのでノベツに書き來つた爲甚だ錯雜に陥つた嫌ひがある切に讀者の諒察を乞ふ次第である。(未完)
(大正七年九月廿六日)

當家顯本論概要 高二 菊池泰旭

第一章 顯本論の原由

一、教說上之原由

世尊出世の大事は末世之赴レ機然かも末法爲正は是佛意の樞要、故に世尊三個の鳳詔二個之諫曉以て末世弘教の導師を任せんと爲玉ふや他方來過八恒沙の大衆強請すと雖も末世の衆機弊惡にして三毒四魔毒刃を逞ふす『當著忍辱鎧爲說是經故忍此諸難事我不愛身命』の居士に非らずんば不可能あるべし『止ミ善男子不レ須ヒ汝等ノ護ニ持スル此經ハと特に下方の本化を召す。茲に唱導之首各々將テ六萬恒沙ノ眷屬ヲて虚空會上に涌出し右繞三師恭敬禮拜嚴かに佛に問尋す、是を見聞せる一座の大衆

懷疑の念々々として彌勤等『從昔已來不見不聞』と驚歎せり。愚詞を弄せんより實る經を引かん。經文、能其様を具らかにす (混出品)

佛昔從釋種 出家近伽耶 座於菩提樹 爾來尙未久此諸 佛子等 其數不可量 久已行佛道乃至

譬如少壯人 年始二十五 示人百歲子 髮自而面皺 是等我所生 子亦說是父 父少而子老 舉世所不信

茲に大聖世尊三誠懇篤に且く五百塵點の喩に倚せて久遠本地を顯發し玉ふ 經に曰く

『爲是人說我少出家得阿耨多羅三藐三菩提然我實成佛已來久遠若斯』文 (壽量品)

是實に顯本論基脚也

二、祖判上之原由

宗祖開目抄下(十二答丁四己下)寶塔、涌出、壽量三品の生起々盡を丁寧に懇示し玉ふの今は『御義に傳』之網格に隨て宗祖の顯本思想を窺がひ併せて當家顯本論の原由を探ぐらんと欲す。

『當品ノ意ハ我ト者法界ノ衆生ナリ十界己己ヲ指シテ我ト云也者ト者無作三身ト定ノナリ此ヲ實ト云也成ト者能成所成ナリ成ハ開ク義ナリ法界無作三身ノ佛ナリト開ク也佛ト者此ヲ覽知スルヲ云也己ト者過去也來ト有未來ナリ已來ノ中ニ現在有也』 (御義下十丁右)

『久遠ト者不レ働不レ繕本ノ儘ト云義也無作三身ナレバ初テ不レ成之不レ働ナリ三十二相八十種好ヲモ不レ具足一是不レ繕也本有常住ノ佛ナレバ本ノ儘也是ヲ久遠ト云ナリ久遠ト者南無妙法蓮華經也』 (御義下十七右)

恚した宗祖の醇乎たる斷奠に依て吾人は開迹顯本が唯に伽耶近成に執するの迹情を蕩破せんとにあらざして要は佛陀の本地を顯發し以て衆生個性の先天的眞價を發輝せんとするに在る事を知る。須レ知所化の教益は能化の實事を究むるに存する事を 然も佛陀一人の顯本は即法界森羅の顯本たる也

第二章 當家顯本論之概要

一、約身

凡そ當家顯本論の概要を續述せんとするに先だ

ち便宜上三段となす。先に約ニ佛身、次に約ニ正法、後に約ニ依法す

其れ吾家の意無始本有の事成を以て久遠の實成と爲す。無始本有の事成とは何ぞ無始なるが故に無終也無始無終是を常住となす常住とは『無盡之現前也』(宗義抄上四十九)佛陀忍土に生を受け甫めて十九歳無常を感じて國位寶冠を泥視し求道練行『而立』にして能宇宙の眞理に投射し以て道を成ずとす蓋し衆生化益示現の相にして然かも是久遠本佛の波瀾推移の一面也堂々たる努濤是大洋也努濤と大洋と別なりと云ふか努濤を去らば大洋を盡すべし努濤起る處是大洋也努濤と大洋とは一体耳伽耶近成を去らんとするものは本佛の靈光に接し能はざる薄德之人不幸之徒たり伽耶の佛陀の外久成の佛無ければなり然して伽耶近成即無始本有の本佛は無始無終本有の覺体にして改めて悟るべき無く成すべき無き無作の三身也

『不レ働不レ繕本儘ト云義也無作三身ナレバ初テ不レ成』

云々 (前引)

と然るに壽量の文上正敷數量劫數を尙存して無始久遠と云はざる所以のものは何ぞ他なし始即本を知らしめん爲の能顯の方便耳。若し直に無始を論せんが始成即久成何を以て知らん、永く理談に座して、本來自然無始無終無作の三身是事成本覺久遠本佛の當体たるの妙旨を知る事、不能して依然『迹中三所談』てふ城壁を一步も出づる不能也。

故に吾家の所談五百塵點の久成に倚せて無始久遠の事成を表顯する也『校職灌頂抄』曰く

『此三身者無始本覺ノ三身ナリ且ク立ツルモ五百塵點劫ノ成佛ニ三身即三世常住ナルトテ云々』(遺文十六五)

千〇二十八頁

二、約正法

已上伽耶近成犬六の佛陀是實に無始本覺常住無作の三身なる事知ぬべし、『受職灌頂抄』に曰く

(共二十六卷六千〇二九)

『此品ノ肝要ハ者明シテ釋尊ノ無作三身ニ欲レ命増ニ進セ弟子ノ三身ニ云々』

又曰『釋尊ト與ニ我等ニ者本地一体不二ノ身也釋尊

ト法華經ト我等ト三者全体不思議ノ一法ニシテ全無ト三ノ差別ニ也』云々

是等の御教判に従へば佛の顯本は是即吾人々類一般の顯本也、顧れば吾人は有待有限也風前の燈火に譬し朝の露と敢果無く、壽長ありしと云ふも尙百歳を越へず体軀大也と云ふも六尺不レ及べし之を宇宙の大に比せんか其時間と空間とに依て絢なせる宇宙は實に無限無際あり然し乍ら吾人此小ある個人是元『釋尊ト與ニ我等ニ者本地一体不二ノ身也』吾人が有限と見、有待と思惟するは是其本体の現象部面皮相的觀察に屬するものにして、實に吾人の本体は久遠の生命を有し宇宙法界と体を等ふするもの也物理學は物質不變の定則を以て之を證明し宗祖の御指南枚擧に盡し難し。

大聖本地の顯本焉ぞ獨り釋尊のみに限らんや客現的顯本は即吾人の主觀的顯本也

三、約依法

總勘文鈔曰く

『十方法界ノ正報有情十方法界ノ依報國土和合シテ

一體三身即一四土不二ノ法身一佛ナリ十界ヲ爲レ身
法身也十界ヲ爲レ心報心也十界ヲ爲レ形應身也十界
ノ外無レ佛佛ノ外無レ十界ニ依正不二身土不二ナリ

(遺文廿七冊三ウ一八九八)

『本門ノ心談ニ無作三身、此無作三身ト者佛ノ上計ニテ
不レ云レ之森羅萬法ヲ自受用身ノ自体顯照ト談ル也』

(御義下四十三左一四九)

其れ既に佛陀は四大の所成也三身相即四土具足
の身也依法の森羅萬象亦四大の所成体相用本具四
土具足の當体也佛陀に顯本ある何ぞ依法に顯本無
きを得んや。故に本門の意、所謂印度生誕世成道
八十八滅の佛の當位に本覺無作の眞相を談ず、何
ぞ有形現象の森羅當位に顯本無きを得んや。松竹
當位即妙事々無礙也。若し具に云はんか顯本の有
無を論する尙未多當家の實義にあらざ『不働不繕』
なり既に顯本すべきなき也今は顯本に依て無作本
覺を了知するものにして幾分赴様に屬す。

嗚呼本位の手腕にあらずんば唯人が之を能くせ
ん。吾人幸に値ひ難き妙法に遇ひ『地涌にあらず

んば唱へ難き妙法』を朝夕口にし『本眷屬』て不
域に徹到せる、誠に長夜の夢忽に拂除し本覺の悟
に皈せしものか、是を事の顯本即身成とあす已上

鎌倉殿中間答考

高二 藤田高肇

宗門教義研究の一他面には、常に史的考究の離
す可からざるは云ふを待たず、然れども祖滅後、
宗門教理史上に顯れたる問答の如き、之を達意的
に研究し之を具体的に述作せる、著作無きは吾人
の大に怪しむ所なり、(近時小笠原殺堂師日宗史談を公に
せらるる日猶淺く人の掌中に入らず)
古來本宗は第四期文書宗論時代に限らず、祖滅後
六百有餘年間、宗勢一變時代、又は沈衰時代及多
小の攝受論者輩出せしと雖も、兎角破排主義に立
脚せる故、何れの時代に於ても各宗憎惡的的たり
き、従て彼れ此の緇素間には、紛騒、問答、宗論
等屢演出せられき、其實否は暫く置き我は彼に勝
てり』と云ひ、『彼は我に伏せり』と云ひ、自他共
に實論、虚論、上げて數ふ可からず、此に吾人の